

令和2年度 奈良市立西大寺北幼稚園 研究実践概要

園長名 大西 育代  
全園児数 45名

1. 研究主題

夢中になって遊び込む子どもの育成をめざして  
～自ら考え行動する環境の工夫～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

自ら考え行動する力を身につけるために、遊びや生活を通じた体験による教育、アクティブラーニングすなわち「主体的・対話的で深い学び」の土台を形成することが幼児教育で求められている。幼児が主体的に行動するには、「おもしろい」「もっとやってみたい」と繰り返し取り組む中で試したり、自分なりに考えたり、友達の刺激を受けたりして、夢中になって遊び込む中で育つと考えられる。遊びや活動の中で、発達段階を捉えながら、興味関心を受け止めていく中で、自ら考え行動する子どもの育成を目指し、幼児が心を動かし、自ら「やってみたい」と遊び込む環境や保育者の援助について探っていきたいと考え、主題を設定した。コミュニケーション能力を伸ばす豊かな体験ができるような保育内容を工夫し、実践する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

○ 主体的に身近な環境にかかわり、幼児が興味や関心を深めながら「もっとやってみたい」と感じ、夢中になって遊び込む保育内容の創造や工夫に努める。

②研究の重点

- 子どもがおもしろさを感じ「やってみたい」と自ら環境に関わり、夢中になって遊び込む環境づくりを工夫する。
- 子どもが夢中になって遊んでいる姿を見取り「もっとやってみたい」につながるように援助を工夫する。
- 保護者や地域との連携を深め、保育内容の充実に努める。

③活動の方法

\_\_\_\_\_環境構成      -----保育者の援助      ~~~~~主体的に関わっている姿

【事例1 4歳児『ザリガニ釣りたいな』 6月】

<ねらい> ○保育者や友達と一緒にしたい遊びを見つけて遊ぶ。

○小動物に興味をもち、親しみながらかかわって遊ぶ。

近年、生き物に触れる機会が少ないため、小動物に興味をもち、触れ合って遊べるよう、大きな水槽やたらいにザリガニを飼育する。子どもたちが見やすい場所にたらいを置き、子ども達が

無理なくザリガニに触れ合えるよう、大きな透明カップ、トレー、割りばし、掬える網なども用意しておいた。ザリガニを飼育し始めてしばらくは、手でザリガニを触ることができにくく、「ザリガニ釣りたいんだよね」と話しながらもカップやトレーで掬ったり、カップに入れて遊んだり「これ赤ちゃんや。」「かわいいね」「なんかひげがある」と観察したり「後ろに行った」とザリガニが入るようにカップを後ろに置いたりしていた。5歳児が棒と糸で釣り竿をつくり、ザリガニを釣っているのを見ると、見様見真似で水槽に糸をたらしザリガニ釣りを始めるが、竿を動かしながらザリガニを追いかけ、「釣れないな」「逃げないで」など話しながら釣っている。釣れない苛立ちからか「なんで釣れないの」と水を棒でたたき始め、パシャパシャと水しぶきをあげていると、一緒にザリガニ釣りをしていた友達が「やめて」と怒り、「じっとしとかなないと逃げるよ」と自分の経験から感じたことを話す。しばらく横で糸を垂らし、じっとザリガニの様子を見ている。ザリガニがえさを食べ始めたのを見て竿を上げるとザリガニが釣れ、嬉しそうに保育者の顔を見る。その様子を見ていた子どもも、ザリガニがハサミで糸を挟んだタイミングで竿を上げるとザリガニが釣れすぐ落ちるが「釣れた!」と嬉しそうに話す。その後の遊びの話し合いでの「どうしたらザリガニが釣れるの?」という保育者の投げかけに、「動いたらあかん。どっかに行っちゃおうよ」「そうそう、後ろに行っちゃおう」「あのね、ザリガニがね、ハサミでギョってしたときに釣るよ」「ザリガニ君がね、もぐもぐってね、えさを食べた時に釣る。」と身振りを入れながら自分の経験を話す。その他にも「お腹がすいてないとダメなんじゃない?」「ハサミ離しちゃったらあかん」など自分たちが思ったことを話す。

#### 【反省・評価】

- ・ザリガニのハサミが怖くて、なかなかザリガニと触れ合いにくい子どもも、ゼリーカップやトレー、釣り竿などを使うことで、ザリガニとの距離が縮まり、じっくり見たり、生態に気づいたりしながら、興味や関心をもつ姿に繋がった。
  - ・友達や5歳児からの刺激が受けられるよう、交流できるような場を大切にし、橋渡ししたことで、周りに目を向け「おもしろそう!」「やってみたいな」という思いが膨らみ5歳児の知恵を借りて「ザリガニ釣りがしたい」と思う気持ちにつながった。
- また、保育者がやり方を知らせるのではなく、5歳児との関わりの中で知ることで、遊びを伝承する姿が見られた。また、保育者が個々に遊んでいる子どもたちのつぶやきや、思いを橋渡しすることで周りの友達の様子に気付き、それぞれの感じ方や楽しみ方でザリガニとふれあいながら生態に興味をもつ姿に繋がった。

#### 【事例2 5歳児 『ウォータースライダー』 7月】

<ねらい>○友達と思いを出し合いながら、一緒に遊ぶことを楽しむ。

○土や水、泥の特性を知り、遊びに取り入れる。

土山に水をたくさんかけて遊んでいると、滑ることに気づき「泥めっちゃ滑る」「こけそうになるけど楽しい」と友達と話しながら遊んでいる。しばらくすると「もっと大きい山でした方が滑るんじゃない?」「あっちの方が大きいからめっちゃ滑りそう」と話し始めた。保育者も子どもの思いに共感し、「確かに、大きな山の方が滑りそうだね。何がいるかな?」とみんなで話が出来るように声をかけその様子を見守った。すると「築山にブルーシートをして、その上を滑ったらいいやん」「板みたいなやつに乗っても滑りそう」「水流したらもっと速く滑れそう」と考えたことや、必要な物を友達と話し合っていた。

翌日の朝、昨日の話し合いで出ていたブルーシートやプラ段ボールの板、水を流せるようにタライなど必要な物を準備しておく、登園してきた時にに見てきた子どもたちが「早く遊びに行

こう」と友達を誘い合って遊び始めた。繰り返し遊んでいる中で、「上から水を流したら昨日よりも早いスピードで滑れる」「タイヤが満タンになるまで水を入れた方がもっと滑ると思う」「服で滑るよりこの板の方がよく滑るわ」と気づいたことを話したり、水を流す役と滑る子で「いくよ。」「いいよ」「1. 2. 3」と声をかけ合ったりして、遊びが継続した。

#### 【反省・評価】

・繰り返し遊ぶ中で、服で滑るよりも板を使った方がよく滑ることや、水を上から流すことで今までよりも速いスピードで滑ること等、水の量や山の高さ、スピードの違いを知ることにつながった。

・子ども達の考えた必要な物を使いやすい場所に用意したことで、考えたことを試したり、友達と思いを出し合ったりしながら「もっとしたい」と遊び込む姿につながったのではないかと思う。

#### 【事例3 5歳児 『グラグラ橋をつくりたい』 9月】

<ねらい>○友達に思いを話したり、友達の話を聞いたりしながら、自分たちで遊びを進めていこうとする。

○進んで体を動かす遊びを楽しみ、いろいろな動きや力の入れ方を経験する。

数名の子どもたちが昨年の5歳児がしていたロープ渡りを思い出し、「先生、ロープ張りたい」と伝えに来る。保育者は、子どもたちの思いを受け止め、ロープ渡りができるようにしておく。また、自分たちで遊びを進めていけるように板、巧技台などを用意しておく。

はじめはロープを渡るときの不安定さを楽しみ、揺らしてみたり、全部渡れたことを喜んだりしていたが、やがて「コースをつくろう!」と板や巧技台、はしごなどを組み合わせてアスレチックコースをつくりはじめた。家で経験したフィールドアスレチックを思い出して「グラグラの橋とかあるんやで」「つくりたいなあ」と話している。保育者が子どもらの思いを聞き、一緒にロープを張ると、早速板材を持ってきて吊り橋をつくりはじめる。はじめ、ロープに板を固定するために布テープを使うが、テープがはがれてしまい、上手くいかない。興味をもった周りの子どもたちも集まってきて、「釘とかでしたらいいんじゃない?」「ロープで結んだら?」と一緒に考えている。一人の子が縄跳びを持ってきて、ロープと板材を結んで乗ってみると、板が動かず、うまく固定できた。周りの子ども結び方を教えてもらいながらみんなで吊り橋づくりをした。その後のアスレチック遊びでは、友達や4歳児の子どもたちが遊びやすいように、危ないところを伝えたり、看板や見取り図をかいたりする姿も見られた。

#### 【反省・評価】

昨年度の5歳児の遊びを思い出し、興味をもった子どもたちの思いを受け止め、そこから自分たちで考えや思いを出し合いながら遊びを進めていけるように使い慣れた道具や材料を取りやすい場所に用意しておいたことや、子どもたちが十分に試行錯誤しながら取り組めるように時間を保障したことが、子ども同士で話し合いながら遊びを進める姿につながったと考える。

#### 【事例4 5歳児 『みんなの幼稚園をつくろう』 11月】

<ねらい>○活動に見通しをもち、出来上りを楽しみにしながら共同製作に取り組む。

○友達同士で思いを伝え合いながら、同じ目的に向かって活動を進めていこうとする。

2学期も半ばになり、クラスで今までしてきた遊びを思い出しながら、楽しかったことを話し合う。子どもたちは今までしてきた遊びを楽しそうに話し、周りの友達も興味をもってきている。保育者は子どもたちの話を受け止め、みんなでつくってみることを提案する。

隣のクラスと一緒に自分のつくりたいものを決め、グループごとに絵をかく。遊びに使ったものを話し合ったり、こんな風につくってみたい、という思いを伝えたりする姿があった。今年度は感染対策のため、共同製作活動を小グループにする、活動場所をリズム室ともう一部屋使って行うなどした。各活動場所に製作に必要な物を整理して置いておき、自分で必要な物を選んで使えるようにした。製作が始まると、友達同士で何からつくろうか話しながら進めている。アスレチック遊びをつくるグループは、竹の棒を組み合わせせてジャングルジムをつくっていたが、なかなか上手く立てることが出来ず、「ここがクシャってなるから倒れるねん」「もう1こ棒がいるのかなあ?」「この椅子で支えたらいいと思う!」とやり取りをしながら試している姿があった。また、活動中は小グループごとに振り返りの時間を設け、出来たことや続きはなにをするかなど、友達や保育者と話し合う場を設けた。保育者は、子どもたちの頑張ったところや工夫したところを認め、次にしたいことや必要な材料なども話題に出来るように質問を投げかけるなどしながら、子どもたちが自分たちで活動を進められるようにしていった。

また、他グループの作品にも興味をもてるように、クラスでも自分たちが頑張っていることなどを話す機会をもつ。「ジャングルジムがなかなかまっすぐ立たなくて難しいな」「ティラノサウルスの牙や爪をこわくつくったよ」など、いろいろな話が聞かれる。翌日、活動の合間に他グループの作品を見に行き、「ほんまや、牙がギザギザで本物みたいやな」と話している姿も見られた。

#### 【反省・評価】

新型コロナウイルス感染防止のため多人数での作業や話し合いなどは制限された中での活動であったが、自分たちがつくりたいものを絵にして可視化したり、グループごとでの振り返りを行ったりすることで、一人一人が活動に見通しをもち、目的を共有することが出来たと考える。また、クラスなどで他グループの様子を聞く機会をもったことで、自分たちだけではなく、友達のつくっているものにも興味をもって出来上がりを楽しみにすることが出来た。

#### 5. 研究の成果

- 保育者は、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、おもしろいと感じたりしているのかを見取り、思いに寄り添いながら、いろいろな素材や環境を用意したり、必要に応じてヒントや認める声かけ、子ども達が自らやろうとしている姿を見守るなど、その年齢や場面、ねらいにそった保育者の援助をしていくことが大切であると再確認した。
- 4歳児は5歳児、友達または地域の方、家庭での経験など、生活や遊びの中でいろいろなことに刺激を受け、興味関心を広げたり、今まで経験したことのないこともやってみようと挑戦したりする姿につながっている。周囲の人やものに深く関わりがもてるように環境を再構成したり、友達と一緒に考えるきっかけをつくったりすることが大切である。
- 5歳児は子ども達ならではの発想で自分達の目標をもち、友達と協力したり、繰り返し挑戦したりしながら、「楽しい」「もっとやりたい」と遊びが展開し、継続して遊び込む姿が見られた。遊び込む環境づくりには時間や物を見直すことが大切である。

#### 6. 今後の課題

今後も、幼児が心を動かし「もっとやってみたい」と感じ、夢中になって遊び込む幼児の姿を目指し、保育内容の充実を図り、保育の質を高めていきたい。